

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12742

研究課題名(和文) 怖いのになぜ見たいのか？回避性感情が引き起こす接近性反応の機能的意義の解明

研究課題名(英文) Approach Responses in Avoidant Emotion

研究代表者

分部 利紘(Wakebe, Toshihiro)

西南学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：50747772

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：恐怖は通常、個体の生命や生存に脅威をもたらす存在から当該個体を回避・逃避させる回避性感情として理解されている。一方でときにヒトは(そして動物も)、当該個体の生命や生存に脅威をもたらさず存在に自ら接近することがある。これは、回避性であるはずの感情が接近性の反応という矛盾する行動を引き起こしていると解釈することができ、学術的示唆に富んでいる。本研究ではこのような回避性感情における接近性反応がなぜ、そしてどのように生じるのかについて、質問紙法および生理心理学的手法による検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

回避性感情に伴う接近性反応の機能的意義については、これまで将来の脅威を回避するための合目的行動として捉える向きが強かった。この考えについて本研究では、事象が生じた原因に関する興味、事象が生じた結果に関する興味という新たな観点を導入し、検討を行った。その結果、回避性感情に伴う接近性反応は、将来の脅威を回避するといった合目的性をもったものというよりも、覚醒度の高まりを求めるために過ぎない可能性が強く示唆された。

研究成果の概要(英文)：Fear is generally understood as an avoidant emotion that causes individuals to flight from threats to their life or survival. However, humans (and animals as well) sometimes exhibit behaviors that involve approaching the very things that should threaten their life or survival. This can be interpreted as an approach reaction triggered by what is supposed to be an avoidant emotion, providing rich academic insights. This study examines why and how such approach reactions occur in avoidant emotions, using questionnaire methods and psychophysiological methods.

研究分野：心理学

キーワード：回避 接近 感情

1. 研究開始当初の背景

自身の生命が脅かされると、個体は恐怖と呼ばれる感情を抱く。このとき、その身体においては、ストレスホルモンの分泌によって心拍数や呼吸数、血圧の上昇が生じ、筋肉や一部臓器の活動が促されることになる。これらは、個体が自身の生命を脅かす存在に素早く対処する(特に同存在から逃避する)ための素地となることから、恐怖は回避性の感情・反応として生体の生存を支えていると広く考えられている(Anderson & Adolphs, 2014)。しかしその一方で、ヒトは(そして一部の他の動物も)ときとして、自身の生命を脅かすような存在を見たい、知りたいと感じたり、実際に見に行くといった反応をしたりする場合がある。これらは、当人の生命を脅かす存在に個体を近づける感情ないし接近する反応であるため、恐怖を回避性感情、回避性反応と捉える現行の枠組みからは説明することが難しい。では、なぜ、そしてどのように回避性の感情が接近性の反応を生み出しているのだろうか。本研究ではこのような問題意識のもと、機能的意義を調べるための研究として質問紙調査法を用いた研究を、生起機序を調べるための研究として生理心理学的手法を用いた研究をそれぞれ行った。

2. 研究の目的

回避性感情における接近性反応の機能的意義については、大きく分けると2つの考えが提唱されてきた。一つは、将来の脅威を回避するための情報収集という考えである(Asma, 2014; Oosterwijk, 2017; Oosterwijk et al., 2020; Scrivner, 2021)。これは、個体の生命を脅かす対象に接近することで、その情報を得て対象を理解し、将来同様の脅威に直面した際に十全に回避できるように備えるといったものである。だが、これらの研究では人が暴力的な画像や社会的衝突の画像を選好することやその際の脳活動については示されているものの、先の考えを支持する知見まで得られているわけではない。もう一つは、感覚希求に基づくものである(Martin, 2019)。これは、恐怖喚起時に生じる覚醒度の高まりを得るために個体は脅威に接近するという考えである。実際、心臓がドキドキするような体験を求める人ほど感覚希求尺度(Zuckerman, 1971)の得点も高いといった関係は示されており(Rozin et al., 2013)、回避性感情が接近性反応を生み出す理由に一定程度の答えを出しているように見える。しかし、感覚希求尺度は同種の体験への選好に関する質問項目から構成されていることをふまえると、先の相関関係は同じ概念を測定したことに起因している恐れもある。これらを踏まえて本研究では、回避性感情における接近性反応の機能的意義として将来の脅威を回避するための情報収集および感覚希求という2つの観点から検討を行った。

回避性感情における接近性反応の生起機序については、側坐核などのいわゆる報酬系の関与を指摘する研究は多いものの、それらは恐怖反応の調整(Reynolds & Berridge, 2003)や回避学習(LeDoux & Pine, 2016)を担っていると考えられている。裏を返すと、回避性反応がいかにして接近性反応を生じているのかという問題については、特段の先行研究となるものは見つけられなかったため、本研究では身体生理反応の関与に焦点を絞って検討を行った。上述したように、自身の生命を脅かす存在に直面すると、個体の身体においては心拍数や呼吸数の上昇などの身体生理反応が観察される。そしてこれらの反応は、損失を回避するといった行動の発現契機になることが示唆されている(Bechara et al., 1994)。したがって損失の回避と同様に、将来の脅威の回避行動となりうる回避性感情に伴う接近性反

応もまた身体生理反応と関係している可能性がある。そこで本研究では身体生理反応の関わりという観点から、同反応の生起機序についての検討を行った。

3. 研究の方法

質問紙法を用いた研究では、ある脅威に遭遇したという仮想的な場面を提示したうえで、喚起された恐怖感情の強さ、脅威に遭遇した原因に関する興味の強さ、脅威に遭遇した結果に関する興味の強さをそれぞれ測定した。また、自身が将来当該の脅威に遭遇すると思う程度とともに、性格特性として悲観的防衛主義 (Norem & Cantor, 1986) または曖昧さの統制 (西村, 2007) と感覚希求とを測定した。脅威に遭遇した原因は、将来の当該脅威の回避に直結するため、将来の脅威を回避するうえで有用性が高い。また、将来の遭遇可能性、悲観的防衛主義、曖昧さの統制が高いほど、当該脅威に関する情報を収集する必要性が高まる。したがって回避性感情における接近性反応が将来の脅威を回避するための情報収集として発現しているのであれば、喚起された恐怖感情の強さとこれらの変数とが相関すると予想された。一方、脅威に遭遇した結果が分かれば、脅威の危険性をより具体的に認識でき、覚醒度はより高まると予想される。したがって回避性感情における接近性反応が感覚希求のために生じているのであれば、感覚希求の性格特性とともに脅威に遭遇した結果に関する興味の強さが喚起された恐怖感情の強さと相関すると予想された。

生理心理学的手法を用いた研究では、恐怖を喚起させる刺激を一瞬だけ提示する (闕下提示) とともに、本刺激提示による精神性発汗 (皮膚電気活動) を計測した。同時に、当該刺激の提示によって手に発汗が生じたと思うか否か、および当該刺激を見たいと感じるか否かを尋ねた。回避性感情における接近性反応に身体生理反応 (本研究では精神性発汗) が関与しているのであれば、精神性発汗を伴う刺激提示のときほど当該刺激を回避するといった傾向が観察されると予想された。またその傾向は、自身の精神性発汗に気づきやすい人ほど顕著であることが予想された。

4. 研究成果

本研究では、回避性感情とされる恐怖が接近性反応をもたらすという逆説的な現象に着目し、その機能的意義および生起機序について検討を行った。

研究の結果、恐怖感情の強さは脅威に遭遇した原因に関する興味の強さとは相関しないこと、恐怖を強く感じており、かつ脅威に遭遇した原因に興味を持つという下位集団は形成されなかったこと、悲観的防衛主義や曖昧さの統制などの性格特性は接近性反応と相関しなかったことが示された。同時に、恐怖感情の強さは脅威に遭遇した結果に関する興味の強さと相関すること、恐怖を強く感じており、かつ脅威に遭遇した結果に興味を持つという下位集団は形成されることが示された。これらは、回避性感情に伴う接近性反応が将来の脅威回避のための情報収集として発現しているという考えに反するだけでなく、寧ろ同反応が興奮状態を求める感覚希求のために生じているという考えに沿うものである。同様の結果は複数の質問紙法を用いた研究で観察され、一定程度の頑健性も示された。

なおこの他にも、回避性感情に伴う接近性反応にはしばしば後悔も伴うことから、後悔の強さを規定する要因などについても検討を行った。その結果、例えばこれまでは、得られたはずの結果の望ましさと実際の結果の望ましさととの差が後悔の強さを規定する (例えば、実際の結果は望ましいものではないが、得られたはずの結果は望ましいものであったはずと考えているほど、後悔が強まる) とされていたが、それ以上に、望ましい結果を得る効力感

の差が後悔の強さを規定する（例えば当時であれば望ましい結果を得ることは容易であったが、現在ではそれがほぼ無理であると考えているほど後悔が強まる）ことが明らかになった。この知見は、衝動的行為の結果として生じる感情（すなわち後悔）について理解を深めるだけでなく、上記の「脅威の発生結果に関する興味」「脅威の発生要因に関する興味」という着眼点を生み出す契機となった。

一方で生理心理学的手法を用いた研究では、恐怖喚起刺激の閾下提示に伴って精神性発汗の増大が観察されたものの、当該刺激を見たいという接近性反応との関係性は示されなかった。それは自身の精神性発汗（身体生理反応）に対する感受性の高低の影響を考慮しても同様であった。さらにこの他にも、回避性感情に伴う接近性反応は衝動的に生じる可能性を踏まえ、衝動的行動に対する身体生理反応とその内受容感覚の関与についても検討を行った。しかし、これらについても両者の関係性を示すような結果は得られなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Toshihiro Wakebe & Eiichiro Watamura	4. 巻 17
2. 論文標題 Intensity of Regret, Outcome Desirability, and Attainability of Desirable Outcome	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西南学院大学人間科学論集	6. 最初と最後の頁 153-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 分部利紘	4. 巻 19
2. 論文標題 回避性感情に伴う接近性反応：原因、結果、生起確率、曖昧さの統制、感覚希求の関与	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 西南学院大学人間科学論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	綿村 英一郎 (Eiichiro Watamura) (50732989)	大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------